【巻頭言】

されど空の青さを知れり

前平　泰志

「井の中の蛙大海を知らず」とはよく知られたことわざであるが、後世の人が反発して、それに続く言葉を作ったのが面白い。「されど空の青さを知れり」や、「されど天の広さを知れり」などがそれである。この言葉には、「なぜ、フィールド研究をするのか」という問いを考える際のひとつの答えを暗示しているようにも思う。

井の中の蛙は、確かに大海を知らないかもしれない。けれども、井の中に居続けることによって、井の外にいるものより、見えてくるものがある。天からは、空の青さも、天の広さ自体も見ることができないのである。

＜大海を知ること＞と＜空の青さや天の広さを知ること＞とを比較衡量することに、どんな意味があるのか、という意地悪な質問も飛んできそうだ。「どっちもどっち」ではないかというわけである。

だが、はっきり言おう。そこには大きな違いがあるのである。

私たちは、自分でどうすることもできない大きな制約を受けてこの世に誕生する。性、親、時代、階級、国籍、言葉、環境など、どれをとってみても、自分で選ぶことはできないし、何より、生まれてくるべきかどうかなどということを考えることすらできないで生を受けるのだ。それは、誰もが一種の井の中の蛙から出発することを意味するのではないだろうか。

井の中の蛙であるからこそ、一所懸命にこの井戸から、大海を知るために、井戸から這い上がろう、這い上がろうとする蛙が出てくるであろうことは想像に難くない。「その意気や壮とすべし」である。大海を知った蛙が、未だ井の中の蛙に向かって発する言葉、それが、「井の中の蛙大海を知らず」なのである。

けれども、大海を知った蛙が思い違いをしていることは、何処まで行っても所詮みな自分の井の中から逃れられない、という厳粛な事実である。ひとつの井の中から這い上がったと意識した蛙が、実は、もっと大きな井の中にとらわれてしまうことはありうることである。そして、そのことにいつか気づくこともありうることである。そのプロセスはどこまで行っても、宇宙の終わりを探索するような、果てしない試みである。

生涯学習は、大海を知ることを勿論禁じ手にしているわけではない。大海を知ろうとすることが、反転して思わぬ気づきに至ることはあるかもしれない。他方、フィールドを研究することは、初めから井の中にいて空の青さを知るほうに賭けているのである。私もまた及ばずながら、この試みを生涯続けていきたい。

本誌が今後も末永く生涯学習とフィールド研究とをつなぐ重要な役割を果たしてくれることを願ってやみません。